

伝統工芸

風土と気質、そして城下町が育んだ匠の技



山形 鑄物

900余年の時を経て受け
継がれる伝承の技。

平安時代の康平年間(1060年頃)に源頼義が奥州平定のため山形に転戦した際、従軍した鑄物師が馬見ヶ崎河畔の砂と土質が鑄造に適しているのを見出し、この地に留まったことが始まりとされ、最上義光(1546～1614年)が城下町をつくり鑄物師を保護してから産地として発展していったといわれる。



こ け し



工人の個性が宿る、
素朴さと表情豊かな愛らしさ。

こけしができたのは江戸時代末期頃で、当時は子どもの遊び玩具として東北各地の温泉場のみやげ物屋で売られていたのが始まり。昔からの郷愁をそそる伝統こけしが人気で、山形市内には山形系、蔵王高湯系などが伝承されている。

山形 仏壇



国の伝統的工芸品指定を受ける
日本最北の仏壇産地。

元禄年間(1688年～1704年)、上方との交易で人々の往来も盛んになった頃、寺院建立のため京から招いた仏師と宮大工から仏壇作りの技法を伝えられたのが始まりとされ、享保年間(1716～1736年)に江戸で学んだ木彫り技術を柱に、漆塗師、蒔絵師、金具飾職人などを統合して産地を形成していった。

打刃物・のこぎり

室町時代の延文元年(1356年)、斯波兼頼が出羽の国に入部の折、召抱えの鍛冶師らによって鍛冶集落が形成され、武具や農具を作り始めたのが始まりとされる。江戸時代末期には鎌、包丁、箆笥金具などで需要が拡大し、明治30年頃、農機具の元祖といわれる「稲扱機」で全国的な支持を獲得した。



籐工芸

平安時代に伝来してきた南洋材「籐」を用い、山形に伝わる昔ながらのつる細工の伝統的な技術を取り入れながら、現代の暮らしに合った籐工芸品が造られている。生活用品から育児製品、そしてデザイン性が求められるインテリア製品へと、時代と共に変遷を遂げてきた。



平清水焼

江戸時代の文化年間(1804～1818年)、相馬藩士を招いて開窯したといわれるが、平安時代に慈覚大師が千歳山の土を使って教えたとも伝えられる。千歳山の原土を用い、麓には「陶芸の里」もあって別名・千歳焼とも呼ばれる。伝統技術の中にも窯独自の創意工夫もこらされており、素朴さと味わいを醸し出している。



和傘

江戸時代から水野藩の奨励で盛んに作られるようになり、東北一の生産額があった。一時期百軒を越えた和傘業者も、現在では一軒のみとなった。作品は表面にベンガラを施し、亜麻仁油、桐油で防水仕上げをしている。



張子

幕末安政の頃、京都の土洩江長四郎が山形下条町に土着し、京都嵯峨人形の手法を伝えたのが起こりとされる。木型に和紙を水張りし、上質紙をのり張りして天日で乾燥させ、白いハマグリをすりつぶした顔料を塗っていく。描かれる表情にはどこか愛嬌があり、見る者の心を和ませる。



建具

山形建具の技術で作られる、木造家屋には欠かせない伝統的な襖・障子などは古来から堅牢さが好評を博してきた。近年では、現代建築に合わせたデザインの製品も作られ、全国的に技術が評価されている。



漆器

山形漆器はおよそ300年前に始まり、美しい花塗り(塗立塗)を主体に発展してきたが、現在は「権之助塗」が継承されている。特に、使えば使うほどに色艶が増す「朱蒔法」という独特の仕上げ法を用いて、盆・銘々皿・菓子器・茶托などが作られ、気品のある美しさは、わたしたちの日常生活に潤いを与えている。